

米原淳七郎先生，山中雅夫先生を偲んで

南出 眞助

昨年悲しいことに、オーストラリア研究所にとって偉大な先輩というべき、もと所長のお二人の先生が相次いで亡くなられた。米原淳七郎先生が9月30日に80歳で、そして山中雅夫先生が10月13日に71歳で、永遠の旅に発たれたのである。私は現在もっとも所員歴が長いということで、まことに僭越ながら有吉宏之所長のお許しを得て、お二人の思い出を少しだけ語らせていただくことになった。乱文ご寛恕いただきたい。

山中雅夫先生は研究所開設の1967年に本学着任後、早くからオーストラリア鉱山経営史の研究に取り組み、1975年から刊行された「オーストラリア研究紀要」に毎年のように論文を発表された。1981年の西オーストラリア大学との共同研究を皮切りとする数多くの海外調査にも参加され、ご自身の研究は1994年に『オーストラリア鉱業経営史研究』として集大成された。同年、遠山嘉博先生（現在名誉教授）の後を継いで第5代所長に就任され、それまで旧1号館の一室に間借りしていた研究所事務室を「研究棟」の地階に拡大移転



2001年3月22日 ビクトリア大学との共同研究セミナーにて
(後列中央が山中雅夫先生，向かって右隣が米原淳七郎先生)

され、会議室や書庫を備えた今日のオフィスの原型ができた。所長職を退かれてのちも経営学部長、学院常務理事と要職を経られ、2012年3月に定年をお迎えになったばかりであった。

米原淳七郎先生は1990年に本学に着任され、オーストラリアの税制・財務研究を専門とされた。1997年には山中先生の後を受けて第6代所長に就任され、1998年・2001年にはビクトリア大学との共同研究を主導された。2002年にはニュージーランドのオークランド大学との共同研究を、国内他大学の研究協力者も交えて主導された。そして2003年3月には定年をお迎えになった。

お二人の先輩に対しこのような短文をものすること自体が失礼であるが、私なりに共通した印象を持っている。一言で申し上げれば「己に厳しく人には優しく」の精神であろうか。お二人とも、ご自身の学問には妥協を許さぬ厳しい態度で臨んでおられながら、後進のものには優しく接して下さった。ときとして研究所の運営にさほど積極的ではなかった若手に対しても、またどうぞ気が向いたときに参加してくださいというような口調で、研究の自由を優先させて下さった。

これは、オーストラリア研究所員といいつつもさまざまな「兼業」の中で時間とエネルギーの配分に苦慮している若手所員にとって、実にありがたい思いやりであった。この自由な空気があつてこそ、学際的な共同研究の伸びやかさが生まれたであろうし、組織全体の永続性にも寄与したと思われる。お二人とも若手に狭いテーマを強いることなく、おおらかに包み込んで下さったのである。

——永遠の旅の今はどのあたりかと思う。まだ日本を出たばかりか。いつかオーストラリアの鉾山町に、またメルボルンの街角に、お二人のスピリットが宿ると信じて、後進のものからの感謝の気持ちとさらなる研究への決意を表しておきたい。

〔付記〕学院関係者のご尽力により、故山中雅夫先生に正五位、瑞宝中綬章が授与されました。（2012年11月9日閣議決定）